

## 学習意欲を高める学級経営 —児童の認知的変容と動機付けについて—

所属校：町田市立南第四小学校  
氏名：山本 由紀子  
派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：動機付け・再帰属・認知カウンセリング・脳科学・学習方略

### I 研究の目的

#### (1) 課題

学校の課題として児童の学習意欲の低下があげられて久しい。神奈川県藤沢市教育文化センターの1965年から行われている『学習意欲調査』報告書(2005)では、中学3年生が「もっと勉強したい」と回答した割合が1965年には65.1%、2005年には24.8%と2000年より1%増加したが、全体を通してみれば、やはり大きく落ち込んだままでいる。

学習意欲の低下は、学力低下や学級崩壊等の今日的な教育課題とも無関係ではない。学習意欲を高める学級経営をすることは、様々な課題を解決するためにも必要なことである。教師はどのような動機付けを行うことができるのか、これまでの取組の中に見直すべき点はなかったか、様々な理論を元に考察する。

### II 研究の方法

#### (1) 学習意欲と学習方略との関連

小学校高学年を対象とした漢字学習においてどのような学習方略が有効か、学習観・学習姿勢・成績等との関連を調査した。(表1・2参照)

#### (2) 実践授業

MI理論を活用した漢字の授業を行い、認知カウンセリングの観点から各児童の学習方略を観察した。

#### ①外発的動機付けと内発的動機付け

全国の公立小学校の研究発表等では、「意欲的に」をキーワードとした研究テーマが多く見られる。多くの場合、内発的動機理論が重視され、研究冊子を見る限り、教師は児童が興味・関心をもつような授業を工夫することに力点が置かれている。

学習内容そのものへの興味・関心を高める内発的動機付けは、確かにその後の学習への取組をスムーズにする。だが、個人内で振り返ってみても、興味・関心の高いものもあれば、低いものもある。一教科内ですら、書くのは好きだが、話すのは苦手だというように同一の意欲とはならない。

内発的動機付けと外発的動機付けは常に対比して語られ、望ましいものと望ましくないものという二項対立の中で実践研究が進められてきた。比較的昔から意

欲を高めるために報酬を与えるという方法がとられてきたが、レップター(1973)は、報酬によって内発的な動機が低くなるアンダーマイニング現象を発見した。これが外発的動機付けによる負の部分であり、望ましくないものとされる一因である。だが、先に述べたように、動機付けは、一個人の中に安定的にあるものではない。状況によって絶えず変化していくものである。外発的動機付けで始めたものが、体験するうちに内発的動機付けへと変わることもある。

脳科学で見れば、その人にとっての快の感情が報酬となって意欲につながるのだから、内発的、外発的と個別化して限定した視点で手だてを考えるより、個々の児童にとって何が効果的かという観点で動機付けを工夫した方が有益ではないかと思われる。例えば、外発的であっても、社会性志向の高い児童の動機付けとして、グループ学習を取り入れてみたり、地域・社会への参加をしてみたり、関係性の中での動機付けを高める等の方法は、決してマイナス面ばかりではないだろう。

動機付けには、まずやってみるという体験の積み重ねも重要である。行動の記憶は、次の行動への抵抗感を和らげるからである。どのようなきっかけであっても、単純に否定した価値付けをせず、チャンスを活かしてみるといいのではないだろうか。

#### ②再帰属療法 能力帰属から努力帰属へ

学習性無力感については、Dweck(1975)は、担任教師が原因帰属様式を変化させる再帰属療法を行った結果、単に成功体験を経験させるだけの児童よりも良好な成果が得られたことを示した。

教師は、能力ではなく努力へと再帰属をさせるために、努力した成果があったという達成感をもたせるための試みも必要である。

#### ③努力の物量主義と方略主義

②の再帰属療法のように、能力帰属より努力帰属には成果がある。また、努力への帰属(Weiner 1979)は、統制の位置が内的であり、統制可能である。そのことから、多くの教師は努力を奨励する。加えて、努力は日本では伝統的に大変受け入れやすい。失敗に対

しても「がんばれ」と努力をうながす傾向が見られる。

しかし、日本語の「がんばれ」には、(我慢しろ)の含みがしばしば見受けられる。つまり、辛くても続けると努力の量を奨励するものである。

それに対して、CovingtonとOmelich(1979)は、努力をすると失敗したときに能力のなさを露呈するという不安感情が、自尊心を防衛するために努力から回避させると「両刃の剣」を指摘した。

気を付けなくてはいけないことは、根性論として努力量を推進するだけでは、努力しても達成場面での失敗が重なると、学習性無力感(learned helplessness)が形成されることである(seligman 1975)。

帰属理論では、成功や失敗の原因が能力や運などに帰属されるより、努力に帰属される方がより前向きとなりやすい。そのため、教師は「やればできる」というメッセージを送ってきたのだが、それに付随して努力の成果を実感させるまでフォローが必要である。

認知カウンセリングの中で、努力を量だけではなく、質へと目を向ける試みが検証されている。もちろん、努力量にも価値はある。脳へ繰り返し刺激をすることで、長期的に神経細胞が活性化され、記憶力が高まるからである。だからこれも同時に奨励しつつ、教師はどこにつまずいているのかを診断して、失敗の連鎖から抜け出させる方略もたねばならないだろう。

### III 今後の研究

表1 成績と学習方略の相関係数(一部抜粋)

文を書くとき習った字を使う	0.332 <.0001 334
漢字の意味に注意する	0.331 <.0001 335
書き順を正しく覚える	0.303 <.0001 336
熟語などを調べる	0.26 <.0001 335
くりかえし書く	0.248 <.0001 331
途中から手本を見ないで書く	0.226 <.0001 335

表2 学習姿勢、学習理解と学習観の相関係数

	思考型学習姿勢	記録方学習姿勢	聴覚型学習姿勢	発音型学習姿勢	学習理解
自発学習観	0.3** <.0001 300	0.085 0.14 300	0.248** <.0001 300	0.206** <.0001 300	0.509** <.0001 303
ポジティブ学習観	0.267** <.0001 300	0.09 0.12 300	0.139** 0.016 300	0.176** 0.002 300	0.2** <.0001 303
規律学習観	0.063 0.276 300	0.378** <.0001 300	0.402** <.0001 300	0.062 0.284 300	0.068 0.24 303
幸福感	0.119** 0.039 300	0.183** 0.001 300	0.016 0.782 300	0.189** 0.001 300	0.06 0.381 303
ネガティブ学習観	0.22** <.0001 300	0.014 0.811 300	0.117** 0.044 300	-0.08 0.169 300	0.184** <.0001 303

\*\*、相関係数は1%水準で有意(両側)  
\*、相関係数は5%水準で有意(両側)

### (1) 脳科学と教育

脳科学の進歩により、教育の世界でもその理論を活用しようとする動きがある。安易な素人考えの取組や単純化された一般化には問題があるから慎重に対応すべきだが、脳の機能と意欲との関係が明らかになるにつれ、学習方法にも具体的な方策が考えられるようになってきた。教育を脳科学の観点から見つめ直すことで、わかる授業への道筋がつけられる可能性が広がってくるだろう。

#### ①MI理論

ガードナーによるMI理論は、脳の働きを8つの知能として説明している。各領域の特性を活かした授業を展開するので、児童の不得意分野の理解の助けになり、学習意欲を高めることができるとするものである。

#### ②VAKモデル

記憶のピラミッド(Dale, E 1969)に見るように、どのような五感を使うかという学び方によって記憶の残りやすさが違ってくる。

日常的に使える方法として、Visual(視覚)、Auditory(聴覚)、Kinesthetic(運動感覚)のVAKモデル(Miller, 2001)を利用することができる。

### IV 研究の成果

動機付けは様々な要素がからみあうので、万能の手だては存在しない。そのため、教師は、児童一人一人に合わせて、様々な手だてを組み合わせることが必要であろう。学習方略で見れば、メタ認知能力を育成し、児童が自分自身の方略を見直せるようにしていくことが必要である。漢字学習における調査結果では、「くりかえし書く」という努力量の方略以外に注目できるものがあつた。指導方法にも多様な工夫が必要である。学習姿勢、学習方略を変え、成果を得、自分を伸ばす力、伸ばせるという確信をもてるようになることが、意欲につながる一つのサイクルとなり得る(図1)。授業を見直す視点としての脳科学の研究はまだ手探りの状態であるが、実践を通して有効な事例を検証していきたい。

図1

